

子どもたちに未来を

『小児救急 「悲しみの家族たち」の物語』

鈴木敦秋 著
定価 1785 円(本体 1700 円+税 5%)
講談社 ☎03-5395-3676



坂田三允

日本精神科看護技術協会・専務理事

子どもの容態は急変しやすく、また夜間に具合が悪くなることが多い。元気で遊んでいるうちは、本人はもとより周囲の大人たちも気がつかない。静かになってさあ眠ろうかというところになると、ぐったりしていたり、熱が出ていたりする。朝まで様子を見ようかと考えていると、急に苦しみ出したりして、あわてて救急車を呼ぶことになってしまう。したがって、小児救急はいつも混んでいる。

本書には、3つの家族が登場する。「激務によってうつ病を患い、四四歳で自殺した小児科医」の残された家族、「夜間に小児科医がいる病院が見つからず、七ヶ月の息子を亡くした」若い家族、『小児救急の充実』をうたう深夜の救急病院で、誤診と引継ぎのミスから5歳の息子を亡くした家族の人たちである。

「小児科が危ない」という話はずいぶん前からあった。小児科医が勤務している病院が少なく、救急時に診てくれるところがないのである。その背景には小児科医の絶対的な不足がある。さらに小児科は、大人と同質のケアを提供するためには3倍の人手が必要といわれるくらい経営効率が悪いために、切り捨てられていくという現実がある。そのような医療体制の不備の中で2人の子どもは未来を奪われた。

「小児科医は天職だ」と希望と自信に満ちた表情で語っていた医師がなぜ自殺しなければならなかったか。医療法の規定によって医師は当直をする。しかし、労働基準法では当直を労働として認めていない。

当直明けの日にも医師は一日中働く。救急病院の当直医は眠る暇などない。激務である。

だが、問題はそのような外枠だけのことだろうか。医療者と家族の間には溝がある。どこかで歯車がずれていく、そんな気もするのである。「出会った子どもやその親とことんつきあい『私がこの子の健康に責任を持つから何かあれば夜中でも電話して』と言ってあげたい。けれどもすべての患者にそう宣言してしまえば、おそらく自分のほうがパンクしてしまう」と悩む研修医がいる。一方には『自分の症状を自分で説明できないような子どもの診療はしたくない』という声が当たり前のように聞かれる。現在の医師のおかれた状況。

本書の最終章は、3つの残された家族の人々と「日本小児科学会」の理事を務める小児科医がともに未来に向けて語り合う物語である。小児科医は考える。「医療技術の進歩と呼応するように、患者と医師との距離、医師と看護師との距離は、確実に開いてしまった。(中略)患者を救いたいと願い、寝る時間を惜しんで診療に邁進してきた自分が(中略)患者やその家族の心を思いやることをわすれてはいなかったか」と。

子どもたちから未来を奪わないために私たちにできること、それは経済効率至上主義の奔流に飲み込まれている現状のなかで、一人一人が本当に大切なことは何かを考え、声をあげ、行動を起こすことに他ならないのではないだろうか。



創刊号から書き続けてきたこの欄も今回で終了になります。長い間おつきあいくださってありがとうございました！